

## 高校人国記

広島大学付属高校(広島市南区)④

政官界要職に  
学びを生かす

1955年、校名が広島大学教育学部付属東千田高校と変わったこの全景。現在の広島東千田キャンパスにあった。現在地に移ったのは61年  
(広島大学付属中・高等学校「創立百年史(別巻)」より)

〈かつての卒業生＝経済〉橋本龍一(1893～1968年)芸備銀行と広島銀行の頭取を通算35年務めた▽永野重雄(1900～84年)富士製鉄社長。日商会頭。池田勇人内閣を支えた財界四天王の1人といわれた。広島市名誉市民▽桜田武(04～85年)日清紡社長。日経連会長。財界四天王の1人。福山市名誉市民▽松谷健一郎(18～2002年)中国電力社長、中国経済連合会会長▽田中敬(1923～2016年)大蔵省(現財務省)事務次官。国民金融公庫総裁。横浜銀行頭取▽山口信夫(1924～2010年)旭化成会長。日商会頭。庄原市名誉市民▽石井泰行(1934～2015年)賀茂鶴社長。アカシア会会長▽田中登志子(1938～2019年)メガネの田中チェーン社長▽松尾雅彦(1941～2018年)カルビー社長▽佐々木隆之(1946～2020年)JR西日本社長



元通産省事務次官 児玉幸治

児玉幸治(86)は新制中学が発足した1947(昭和22)年、付属中へ入学。芸備線向原駅から車で1年間通学した。原爆が投下される3カ月前に広島から疎開したのだ。学区制が導入され疎開先から受験できる広島市内の学校は付属中だけだと小学校の担任から教えられ、受験を勧められたという。男子校から男女共学へ変わり、初めて女子生徒が入学したのもこの年。「上級生が用もないのによくやって来ました」

高校時代2、3年が同じ問題の試験を受け、上位に入ると名前が張り出されることがあった。「私も2年の時ベスト10に入ったが、3年が2年に追い越されるとみんな面白がって」。文化祭では小学時代から弾いていたピアノの腕を披露。後にピアノスト小村敏子と一緒にピアノを弾く機会が実現するなど生涯の趣味となったという。東京大を卒業。通産省(現経済産業省)へ入省し事務次官を務めた。対米半導体交渉などを手掛けた米国通で「ミスター通産省」の異名も。その後商工組合中央金庫理事長などを務めた。



大島賢三

政官界へも巣立った多くの卒業生。外務省では国連事務次長(人道問題担当)や国連大使を務めた大島賢三(77)、事務次官や

## 交換留学 生涯忘れがたい記念に

駐米大使を歴任した佐々江賢一郎(69)、現バングラデシュ大使の中谷好江(60)がいる。大島は高校2年途中から1年間、選ばれて米国に交換留学した。世界の高校生と触れ合い「この経験を外交の世界で生かされたい」と思ったという。また貧しかった日本と、豊かで自信に満ち輝いていた米国「この格差の印象は強く、ただただ驚くことばかりでした」。留学生活の最後には全員がホワイトハウスに招かれケネディ大統領のスピーチを聞いた。「あの興奮に満ちた機会は生涯忘れがたい記念になりました」



中谷好江

中谷は外務省で「何かと『女性初』を経験した」と振り返る。北米2課では初の女性担当官として日米貿易摩擦の対応に当たった。経済協力開発機構(OECD)東京センター所長に就任したのも女性初。「与えられた機会を気後れすることなく受け入れてきた背景には、付属時代に培ったもの全てがあるような気がします」

思い出深いのは「何といつても体育祭」。夏休み返上での準備。前夜祭から応援合戦、マスメディア、後夜祭まである総合イベント。「一体感、高揚感、付帯生としての誇りしさは最高の思い出。役割を全うすること、縁の下力持ちの重要性、常に助けてくれる人がいることを学びました」



牛島信

牛島信(71)は検事から弁護士に転身し、小説家としても活躍している。高校時代は

## 体育祭の一体感・高揚感 最高の思い出



湯崎英彦

部活で水泳や柔道、文芸などをやり生徒会長も務めたが、常にの掛かっていたのが「東大へ入らなければという重圧」。そして「将来、自分は何をすればよいのだろうか」と考え続けたという。

現在、東京の首相官邸近くで弁護士56人を含む約100人のスタッフを抱え、企業合併や買収、コーポレートガバナンス(企業統治)などに取り組む。そんな立場から後輩へは「世の中も人生も、あなたが考えているよりもはるかに広くて深い。これまでの体験がずっと素晴らしいことが待っている」と訴える。

広島県知事湯崎英彦(55)も米国留学と体育祭を思い出に挙げる。3年の体育祭では白軍の選手団長。「みんなで協力しなくてはできない一大プロジェクト。2度とできない経験でした。そこから学んだのは『行動しないと結果は出ない』『やりたいことは取りあえずやってみる』こと。通産省、経営コンサルタントなどを経て2009(平成21)年、知事選に挑んだのもその考えがあったからだ。現在3期目。

次回(3月5日)に掲載します。

「高校人国記」は広島、山口両県を中心に回って、高校ごとに話題の卒業生を紹介しています。各校の情報をメールなどでお寄せください。宛先は〒730-0867 広島市中区土橋町7の1、中国新聞編集局「高校人国記」係。メールは、bokou@chugoku-np.co.jp

(客員編集委員・富沢佐一)